

昭和十七年三月二日、軍令甲八号により、独立混成第

十六旅団復員並びに第六十九師団臨時編成下令、編

成地山西省嵐県東村鎮、大隊長陸軍大佐、村川正一。

九月七日～二十日、山西省臨県周辺地区作戦参加。

十二月二十五日～三十日、汾陽北方地区作戦参加。

昭和十八年四月五日～五月二十二日、十八春大行山脈

作戦参加。

九月二十一日～十一月三十日、十八秋晉西北作戦参

加。

十一月二十一日～十二月二十八日、山西省離石県

(省中部大原西方) 西北地区作戦参加。

昭和十九年三月、警備移駐山西省永濟県蒲州着。

四月十五日～七月五日、西北河南作戦参加。

四月二十九日、大隊長陸軍中佐、西村勘次。

昭和十九年七月～昭和二十年三月二十五日、河南省

陝県地区橋頭堡の守備。

昭和二十年二月一日、在支部隊臨時編成(編成改正)

下令。

四月十四日、警備移駐江蘇省嘉定県嘉定着。三代大

隊長大尉、森田豊太郎。

八月十五日、復員下令。

四月十四日～九月二日、滬海道地区嘉定付近の守備。

昭和二十一年一月十三日、内地帰還のため主力

一、〇五三名上海出帆。十六日、佐世保市上陸。

編成以来の死亡者一八四名。入院患者四四名。生死

不明者一八名。入監者二名。計二四八名。外に転属

者一八二名。

追想 中支戦線

愛媛県 大原 四郎

昭和初期、白砂青松の続く我が古里の海岸は、漁師が沖で釣をしており、経済大恐慌で日本国中は大揺れだった。幼き我々は余り関係なく、夏は六尺褌を肩に餅のパンツにシャツ(手製)にて兄や友とよく泳ぎに行った。

潮が引くと浜より沖へ二キロいや三キロも遠浅とな

り、貝類や車海老、カニなど子供の手にも楽に獲れて夕餉の膳を賑わした。見上げる空には太陽がまぶしく照り、入道雲がもくもくと湧き出て本当に暑い夏だったが楽しかった。浜は南に重信川、北は延々数キロの砂浜で、松山連隊の射撃場も途中の小高い砂丘の松林の中にあつた。

小学校へ上がるともう兄の手伝いの耕解きで、近くの神社の境内に友と幾列も伸ばし（約五〇メートル）日暮れまでよく働いた。当時は皆親の手助けをすることが当たり前で、耕解きはお金になるいい仕事であった。我が村は伊予耕の発祥地で、明治二十年頃より耕の生産が盛んで、大正十五年の最盛期には年間生産三十五万反を越え、遠く東北、関東方面に販売し（資料「垣生のあゆみ」、全国屈指の生産地を誇っていた。耕業者（紺屋）は村に数十軒もあり、女兒は「カセ」織り、女は「機」織り、男は紺屋で「染手間」に出て、村民の大半が耕仕事に携わり、村は活気に充ちていた。四年生になると兄の指導でもう立派な耕解き、一、二軒紺屋を受け持つて夏の午後は海、ほかは一年中、

耕とよく働き、兄弟仲良く家の助けをした。食べたらずしの風邪引かずで、粗衣粗食で育った自分は、余り手間のかからない兄であつたらしいが、母離れが出来なくてよく泣いた。入学して余り勉強をした覚えはないが、二年生の二学期に級長にして貰い「起立、礼、着席」が言えなくて当分恥ずかしい思いをした。以後、高等二年まで毎年役をやり五番で卒業をした。背は低かったがスポーツは得意で、六年生では郡の競技大会（道後）に一〇〇メートル代表として走った嬉しい思い出がある。走り巾跳びをやり、鉄棒は大好きだった。

律儀者の子だくさんで、家は貧農三反八畝、米麦の水呑百姓で、七子の四男弟もいて家は何時も賑やかだった。父は米を作りながら長兄と伊予耕を荷車に積んで狭い凸凹道を松山（四キロ位）の間屋へ運んでおり、他の人の用も一緒に片づけていた。母は小柄ながら丈夫でよく働き、頭が切れて上手に子供たちを使い、また人々によく接して家を守り、父母心を合わせて働きながら着々と礎を築いていったので、外見よりは心豊

かだったようで、皆仲良く狭いながらも楽しい我が家だった。

父は日露の大戦に乃木大将の第三軍の麾下で従軍した人だがよく働き、教訓じみたことはいわなかったが身体で教えて子育ては厳しかった。五歳の時お膳に座りお菜が悪いと駄々をこねる自分を「嫌いなら食べない」と片手で身体を引っくり返した。泣く自分に手を貸そうとする姉に「放っておけ」の一言でお預けとなり、後で母に優しく諭された。

今も懐かしい思い出が高等科を卒業すると、次々と口数減らしのため家を出ていく姉兄の後を追うように、旬日を持たず広島八丁堀呉服問屋(株)小田政商店(原爆にて崩壊。一部三階建)に、住み込み店員(丁稚)として入社する。

社員七〇余名の大商店で京呉服は関西以西では売上高一番の実績を持ち、住み込み店員二七名は二班に分かれて寮よりの通勤で新時代を思わすお店であった。緊張すると伊予弁が出て恥ずかしく、半年位は言葉に難儀をした。松山の片田舎の一少年の目を奪う広島は

電車が縦横に走り車が多く、街ゆく人も多く衣裳も派手である。呉と広島は休日には陸海軍人さんの姿が多く目についたが、広く大きい街で、昭和十二年四月、桜も咲き春の歌も流れて街も田舎も長閑であった。

昭和十二年七月、支那事変が勃発して、第五師団も練兵場に「除隊延期」が大きく貼り出されるなど急に巷も騒がしくなった。といっても、衣料統制もそれほどでもなく、日通の駄馬で荷も入り結構活況を呈していた。先輩が現役で入隊し休日には来店して新兵の労苦を聞き、胸を痛めたことも再三だった。

昭和十五年春、同期では抜擢されて山口県の掛(販売集金)を命ぜられ、悲しながら懸命の努力をして成績を維持した。

昭和十六年二月、徴用令により呉海軍工廠水雷部の工員となり道具貸出し係を命ぜられた。どうせのことなら技術を身につけてと、工長に再三懇願するが工員の希望はとて聞き入れて貰えず、渋々我慢する。巨大な工場内は天井走行機が絶えずゆき交い、吊るされて移動する九六式魚型水雷の大きさ、そして暗くて

陰気な工場内に昼夜兼行にて魚雷生産に慌ただしく働く大勢の工員に驚く。

軍港に佇めば山かと見まがう戦艦「伊勢」がドック入り、沖には帝国海軍が世界の列強国をアッと驚かせた巨大な不沈戦艦「大和」の勇姿。頼もしく思いながらも、やがて始まるであろう世紀の大戦を思い、当時大和島根に生を享けた民、まして日本男子のわが身には不安と焦燥の日々であった。

昭和十六年十二月八日、遂に大東亜戦争に突入し(同日、海軍軍属)、国民は華々しい緒戦の勝利に酔った。年々の徴兵検査はどこで働いていても、本籍で友と共に受ける慣わしであったが、軍属という身は帰郷を許されず、昭和十七年十月呉にて受検の結果、甲種一二四番と覚えている。

早くも十二月一日、丸亀西部第三十二部隊に入隊の通知を受けて職を辞す。入隊前日の早朝四時、暗闇の三島神社にて同級三名は村長初め村民多数の盛大な見送りを受け、松山駅を万歳の声と日の丸の旗に送られ、丸亀に到着し指定の宿に入る。

十二月一日、西部第三十二部隊に入隊し、歩兵砲中隊に編入され(中支那派遣軍要員)、早速准尉殿より「外では毎日警察だの裁判所だのいつて人民保護に励んでいるが、ここは日夜人殺しの演習をしている所だ。お前達近日中に間違いなく戦場に送つてやるから充分覚悟して励め」との訓示を受け、身の引き締まる想いをする。

数日は体力検査、被服の受領交換、各種注射等命ぜられたままに行動消化した。八日は面会も許され愛媛、香川よりの集まりで面会所は兵と人で溢れ終日混雑した。自分も父はじめ叔母姉等がはるばる来てくれ、お別れを惜しんだ。

寒風吹き荒れる丸亀練兵場で、敬礼に始まる徒手訓練は緊張の連続、おまけに慣れぬ軍服に編上靴に巻脚絆、まるで田舎の蓮根島に足を突つ込んだ感じで、友も同じだろうが身の動きままならずで歯がゆく、特に丸亀一周早駈けは顎を出し、教官の見えない裏側で呼吸を整え、示し合わせて走った。並んで走る駈け足では遅れたり私語を発する者には遠慮無く教官の鉄拳が

飛んだ。

学科は軍人勅諭と戦陣訓。広島当時一年余、朝の青年学校を経験しただけなので学科で頑張らねばと、以前より勉強していたので大いに助かった。入隊間もなく「勅諭と戦陣訓言える者は手を挙げよ」と言われ、躊躇せず手を上げたが、自分一人だったので鳥肌が立った。

慌ただしい行事の日々が去り、丸亀第三十二部隊にもお別れをし征途につく。下関より釜山。釜山は海が大時化で、見納めと思つた内地の景色も眺めるようにならず、船は満員の上、船酔いにて吐く者、喘ぐ者続出して惨々だった。しかし、自分は幸いにも酔つた覚えが無く元気で友の世話もできた。

新義州、山海関と列車は轟音を放つて荒野を走る。広軌道なので内地と違い座席もゆっくりしていた。車窓より眺める風物は寒々として、小高い丘の樹木も黒ずみ、時に見える住民も黒い衣服をまとい殺風景だ。これが大陸かと、一寸淋しくなる。幸いにも向い席に輸送官の久保軍曹殿がおられて、大陸における生活、

心構え、軍隊内務等の有難いお話を聞かせてくれる。同席の宮内は学業のため一年遅れの入隊という友で、人格指導力共に優れて、将来優秀なる指揮官間違い無しの人物だった。

座席に長く足を降ろしていると足に水が来て皆困っていた。自分は軍曹殿にお願いして木枠の板を貰い、座席の下に敷いて幾夜も寝た。平坦停車、駅での食事受領は短時間での積み込みで混雑を極め、汁は脂ばかりで洗っても取れず、水も不足して困った。

北支廻りで遙か山海関も遠望して、昭和十八年の新春は揚子江のジャンク船上にて迎えた。泥水の中より昇る真つ赤な初日を拝み、大東亜戦の勝利と、併せて身の武運長久を祈った。船はお蚕棚で、頭を上げると梁で頭を打った。船からの眺めにあきると寝転んで宮内と今後のことを胸襟を開いてよく話をし、恋愛哲学なるものを拝聴した。異性を愛することによって己を向上させるとの意にて、なる程と感心する。

武昌に上陸して兵の多いのに驚くが、軍の本部にて各前線に散ってゆくとのことだった。我が第四十師団

長、陸軍中将青木誠一閣下の巡視を受ける。馬上豊かなる將軍は「兵器は金を出せばすぐ間に合うが、兵は二十年経たんと使えん、各自健康に留意して軍務に励め」との有難いお言葉を戴く。

すし詰めは無蓋車にて咸寧（師団司令部）を過ぎ、汀泗橋（連隊本部）にて下車。第二三四連隊本部にて連隊長陸軍大佐戸田義直殿に申告する。中支那に勇名を馳せた第四十師団の人情部隊長、鯨第六八八二部隊長で立派なお髭を貯えられて一人一人答札され、有難い労いのお言葉を戴き、胸に迫るものありて我等この人の膝下に死を誓う。

第十二中隊に編入されて東へ二キロの部落の兵舎に入る。中隊長陸軍中尉洪田与壯殿以下幹部に迎えられて申告し、その夜は新兵が入ってからとお預けになっていたお正月を一緒に祝ってくれ、内地米に勝るといふ取って置き蘇州米を炊いてくれた。出身はどこかとか、また知っている人もいてやはり郷土部隊、これからお世話になる古兵殿とも意気投合して故郷の話に夜の更けるのも忘れたが、翌日主力はもう次期作戦の

ため出発した。

内務班に分かれ、第三班擲彈筒班となる。班員一名で自分が一番のチビッ子だった。負けてはならぬと日々演習に学科、内務に精を出す。夜は許可を得て武器庫にて友と典範令の暗記に時の経つのを惜しんだ。

朝の寒稽古は点呼場での軍歌演習。大きく輪になって復唱しながら行進する。声の大きな自分は早くも目につき中に入れられた。夕点呼前の狭く暗い内務班通路の棚に保革油を灯し、アンペラの上に正座して班長殿の訓示を聞く。軍隊生活や体力等不安ばかりの自分達の心を読み取って、暖かく抱くようなお話に有難く、また頼もしく思い、歳二つ違いなのにどうしてこんな風格があるのか…と「班長の行く所、火の中、弾の中従って行きます」と心で叫んだのは自分一人ではないだろう。

消灯ラップが鳴って、週番下士官殿の巡回、カンテラを手にも勇ましい軍靴の音。重い扉を開けた瞬間皆は息を呑む。「コリヤー消灯準備が出来てないぞ」の一喝に一斉に飛び起きる。何処も悪くないのにこれを繰

り返す鬼軍曹殿。その光景を隅で笑って見ている上等兵殿だった。隊長殿は人の和を大切にされ、私的制裁を厳しく戒められたので、連帯で時に行われたぐらいで苦痛は余り無かった。

一月中頃より二月はこのほか寒く、小雪が舞い、なかなか寝つかれず、また風邪が流行するというので頭と足を交互にして眠るが、汚れた靴下の臭いと寒さのため一夜に小便六回は本当に困った。教官殿にお願いして全員綿チョッキを買って貰い、少し楽になる。

大きな竹樋を継なぎ合わせて近くの小川より水取りの使役に出る。朋友、仙波と二人水車を踏み続けながら懐かしい歌を口ずさみ、忙中閑ありを楽しんだ。

五〇〇メートル隣の中隊不寝番が狙撃されたので急遽討伐に出る。行けども行けども敵を見ず、夜に入るも前進やまず、通訳が土民に問うも判らず、威嚇射撃することとなり、自分が擲弾筒第一筒、夜間道路上に芝を敷き発射する。弾は一瞬筒口より火を曳き着弾音は山谷に飴してその威力計り知れずと驚くが、筒を手から落して危うく前の池に入る所だった。これは失敗

「止板の位置は安定よき所に選ぶ」という教範の一番大切なことを怠り、芝を厚くしたと深く反省をする。

教育期間中も大いなる流れの中で、己を見失うまい、友に遅れまいと懸命で、故郷のこと等考える暇は先ずなかった。学科、内務は自信をもっていたので気が楽だったが、演習は辛く瓦斯マスクを装着しての突撃は呼吸を乱して落後して、班長殿より大声のお叱りを受けた。

作戦部隊ではほかに雑使役もあり、充分なる教育も出来ないまま七十余日の教育を終えて、大隊本部にて検閲を済ませて、主力追及のため引き揚げ準備に入る。事務室等の荷物を汀泗橋まで運ぶが、途中からノルマとなる。これは大変だと相棒の大野と歩きながら小便をした。その大野は次の作戦で戦死し、惜しい男を失った。途中休憩させて貰った中隊で中矢上等兵に逢う。村の先輩で優秀な軽機の射手という。奇遇であった。「元気でやれよ」と励まされ水砂糖を袋に貰い、班員皆で食べ喜んだことを想起し感謝している。

出発前、簡単なる軍装検査で、強行軍で苦しいから

「次に捨てる物は今捨てよ」との教官殿の言葉に、買つて貰つたチョッキもその場に置き、私物を減らして身軽くなり出発する。今日はもう何処かで聞こえる銃声。やっているなあと感じつつの前進だ。出発時より我等を護衛してくれていた第二三五連隊の横井大隊は、墨山舗目前にして強力な敵の攻撃を受ける。応戦するも撃退に至らず苦戦のため、我等も応援に出撃し、夜間歩哨に立つが敵の迫撃砲弾が至近に炸裂し、真昼の如き明るさと、爆発音に眠気も一辺にフッ飛んでしまった。

夜を徹しての攻撃に頑強な敵も敗走したが、部隊の損傷多く、遂に担架をかつぐことになる。我等も連日の強行軍のため疲労甚だしく、患者は一応の処置しあるも、血はにじみ、時にうめき声を発す。まして戸板の担架は肩に重くのしかかり、彼我共に喘ぎながらの我慢の担送だ。華客の街に入ると道は石畳で滑りそう、二日の担送任務を終え、友とホッと安堵の立小便をする。

お互いの色を見てアッと声が出る。血の小便正に真っ赤な血であった。中隊の指揮に入り、数日の休養を得て心身共に楽になる。四月の中ばで小川は清く流れ、柳も長く緑鮮やかで銃声もない。どこで戦争をしているのかと思うくらいだ。

次期作戦の編成に入り、第一小隊第四分隊（擲弾筒）第一筒彈薬手となる。これからが本当の初陣だ。古兵殿に混じって任務についたが、皆に迷惑を掛けてはすまぬと思うばかり「この作戦ボテ（落後）ずについてきたら初年兵は百点」と古兵殿がいったが、その通り未だ経験したことのない完全軍装が背にのり、強行強行の前進は「戦闘は行軍及び激動の後開始せられ、且数昼夜に渡るを常とす」の歩兵操典綱領をそのままの身体中が痛い。特に榴弾八発の弾のうが重く腰にかか

る。

二、三日して行軍も少し慣れ幾分楽になるが、今日は何処までゆくのかやら知るはずもない。今日を今を元気で歩くだけ。軍服も乱れ、顔は汚れて銃も天秤棒かつき、これが教育期間だったら「肱を締めよ」の叱声

が飛ぶが今は実戦、古兵殿も大目に見てくれる。設営に入れば炊飯、洗濯と手分けして短時間で手際よくやらないと休む間はないと頑張るが、晴れの日はいいが雨の日は朝から行軍序列に入るまでに、もう濡れる。防雨外套は防水の効果うすくすぐ浸みる。何時乾かすか分からぬままでの行軍はとくに辛い。

明朝はいよいよ敵前上陸だ。緊張するがぐっすり眠る。早朝四時頃、砲の援護射撃を受けながら艇に乗り込み、そのまま腰は下せぬ中腰だ。艇は煙幕を張って出発、息を呑む緊張の突進だったが幸いにして抵抗なく闇の対岸にうまく取り付く。堤防下で身を潜め、敵状を伺うが前方では銃声激しく聞こえ、尖兵交戦中の模様だ。次第に明るくなるが草の上に潜んでいたのでシットリと朝露を浴びて気分爽快だ。

尖兵は十一中隊で警戒怠りなく前進する。低地帯で道はもっぱら堤防を利用し、下は植えたばかりの稲田だった。ゆく橋に破壊された竹槍を斜めに組んだ鹿砦が幾つもあり、尖兵だろろう同年の星一つの戦死体を見る。合掌し戦鬪の激しさを知る。尖兵は全面の敵に前

進を阻まれたため我が中隊は左一線に進出し、梅田湖付近攻撃のため前進中、水路堤防上にチェコ銃を持つた敵数名を発見、直ちに射撃する。彼我の距離は五〇メートル、堤防下には第一分隊全員伏せたままの丸出し。擲弾筒は使えず軽機と小銃にて攻撃数分、これを撃退させたが、分隊長は右腕切断の重傷を負い、ほかに兵七名負傷の損害。第一筒大野上等兵殿も自分の銃にて攻撃中頭部に裂傷を受け後送となり、自分が筒手となる。以後擲弾筒を背に行軍する。

行軍中は休憩時よく「ポテ」た兵を見る。ピンタを張られる兵（主に同年）を見て涙が出る。人も我も紙一重だ、そして勇気が湧きまた歩く。

新兵は作戦に出て敵と闘う前に体力氣力を充実させ、行軍のこの一大関門を突破しなければならぬと痛感する。数々の試練、死線を越えて新任地焦山河市に到着する。隊長以下長い間の作戦行動のため心身共に摺り減らし眼光鋭く、本当に敗残兵のようだが、この中にいることは幸せだ、闘いの度に消えていく戦友の数々。見えないと思えば、あ、あの友も、で中支第一

線消耗品部隊とはよくいったものだ。

新任地の大隊本部は街の中にあり、近くに住民街があつて治安もよく、商店そして商品も多くて賑わい、川に沿つて南北に堤防が続き、北に中隊の分哨が出ていた。整地、消毒と作業に出るが、自分は早速中隊事務室に呼び出される。窮屈な事務室で仕事するより皆と一緒に作業しての方が時に雑談もできて楽だと思つたが、隊長殿より恐い人事係曹長殿、勿論辞退できず出てゆく。助手兵長殿の書いた原稿で連隊本部提出の靖国神社祭祀名簿等の清書である。粗悪な炭酸紙（複写カーボン紙）にて七枚写しはやりにくく、おさえれば下が汚れて苦心した。

内務班の古兵殿には悪くいわれながら日ごと事務室へ、日中はまだよいが、夜に入り蠟燭を灯しての書は暗くて仕事進まぬ。夜もふければ集中力も落ち、紙がずれてお目玉を戴くが、以後鋭意努力して完了、お手伝いできた。

事務室はほかに功績係准尉殿と兵長殿、同年の当番の清掃ぐらいで割合静か、でも時に隊長殿もお顔を出

される。福岡出身の士官候補生で誠に偉丈夫にて人の和を大切にされ、一兵の身上も精通されており驚く。自分も覚えてくれて遠慮なくお話ができて大変恐縮をした。

中隊行事も進み慰霊祭、祭壇上に白木の箱に各戦死者のお骨が納められ多数並ぶ。白い花と饅頭を供え、中隊全員出席、読経礼拝して冥福を祈る。中隊長の弔辞これが一番辛く「…願わくば昇天の英霊来り享けよ」、これが戦場の運命か捧げる身は惜しくないが、逝きし人の顔が次々と浮かび余りにも辛くて皆手放しで泣いた。大隊、連隊、師団と集まり、司令部にて合同慰霊祭を挙行し南京より宰領者に守られて内地へ行かれると聞く。

昭和十七年七月二十三日、昭和十七年度下士官候補者を命ぜられ、朋友仙波と石首における集合教育に参加する。各出身中隊の名誉のため日々切磋琢磨する精鋭三〇名。何事にも節度ありて敏速なる行動はとても中隊教育の比ではないが、自分も中隊代表の誇りを持つて負けじと一生懸命だった。中隊より重点教育の違

いからか聞いたこともない体操教範が出て面食らう。

号令一つ掛けても動いてくれないがそんなことにお構いなく実学共にドンドン進む。大海に投入された自分達、早く岸に着かねばならぬ、それは己の精進努力あるのみと。

猛暑の八月演習の終わった寸暇を柳の木にもたれて典範令の暗記に励む。学科試験で中庭の事務室より「出来とる者はおらん。大原ぐらいだけじゃ」の曹長殿の大声。「よしやるぞ」と勇氣が湧くが、人間思うようにはならぬもの。体調を崩して診断の結果マラリヤにて後送され、武昌陸軍病院に入院する。後送中に眼も小便も黄色くなり、症状が出てきた。

緑繋る高台に威容を誇る白亜の殿堂は、中支那最前線で戦闘と警備に明け暮れる病身の一兵にとつて、この病院はただ驚くばかり、内地でも見たこともない巨大な建物で、内部も奇麗、白一色に統一され整備された病棟。新式ベット等の充実、その上軍医殿、看護婦さんの心優しい処置に有難く頭が下がるが、いる程に退院したくない不心得者もいて、○部隊桐生は投薬を

飲まずにベット下に隠して、きつく叱られていた。憐れなる奴と腹が立った。自分はとてそんな気になれず、早く帰って学校への気持ちが頭より離れず療養に励んだ。お粥が水臭くなり、下腹部も軟らかくなつて快方に向い、お陰様で治癒となり病院長殿（大佐）にお願ひして直退を許可され、練成班に入らず十二月七日退院する。

船待ちの一日、一人街へ出る。内地の人の店が軒を並べる中の写真館の前に立ち、体力も氣力も快復し星も三ツ（十二月一日、命上等兵）の軍服姿も板につく今、記念に撮つて送ればと父母の顔が浮かぶが原隊は遠い。前線復帰は幾日かかるか計り知れず、如何にせん金が乏しいと扉を開けるを得ず館前を去る。

心配された便衣の襲撃もなく、焦る心で中隊復帰して見れば、入学は出発していて間にあわず、初志は悲しくも挫折した。主力は作戦出動中の留守隊で至極平穩で傷心の身を対岸での炭焼き、野原の兎追い等で紛らわした。

主力が常德作戦より帰還して賑やかになったが、ま

た戦死傷者多く短期間（四〇日）の割に損害甚大であつた。聞けば反転援護にてアンペラ一枚で敵と対し、息を呑む緊張だったという。寂しき限りでまた靖国神社祭祀名簿等書類に当分忙殺されたが、自分なりにゆとりができて楽だった。

戦い終わって迎えた昭和十九年一月下旬、十八年徴集初年兵の教育掛を命ぜられて、二月連隊教育掛の本部近くの通信隊に宿を願う。底冷えのする夜だった。朝破れた窓より粉雪がふとんの上に舞こんでいた。本部は南岳山、山麓にあり連隊長はじめ各大中隊長、副

官、教官、助教、助手と連隊の中樞精鋭を一堂に集めて、大東亜戦及び大陸戦線の状況教育の意義等連隊長殿より詳しいお話を受け、光栄と感謝する。典範令の中で我が連隊での規制にて、着剣、寝射（ねうち）を説明され、実技として「十二中隊」とのお声に「ハッ」とした。正に青天の霹靂、誰が予想したろう。

だが瞬間ハイの声と共に自分は前に出た、胸の鼓動が高鳴るを押えて号令の儘着剣（木皮を握り）続いて寝射ち（角度）の動作は無我夢中でやる。「よし」の

お声で一礼して元の位置へ帰りことなきを得、後刻、教官殿より労わりのお言葉を嬉しく聞くが、本来小銃班の助手の任務だが同年では自分が序列が上だった。

中隊より北の堤防上の分哨を整地拡張して教育内務班を作り、連日戦闘訓練に学科と教育に打ち込む。堤防は街に通ずる幹道にて良民証を見せ通過する。自分の班は愛媛、香川出身で全員八名（一部志願兵）にて共に堂々たる体軀で、動作敏速、内地で教育（三〇日）を受けたほどはあると感心する。青年学校も優秀卒業生であり教育にも精が出る。

西堤防三キロでよく演習をやる。戦闘、散開、突撃、喚声を揚げて突入する。「目標中隊舎前、早駈前へ」の教官殿の大声に皆は一斉に走り出す。「支援射撃をし、然る後突撃す」の我が擲弾筒はいつも最後尾よりの出発だ。自分も一氣に走って皆に活を入れてまた走るが、皆上位にて帰り自分を嬉しくしてくれる。

教官殿は新兵と同年の立志の人で逞しく隊長殿の信頼厚く若さにまかせて、帰隊途中の軍歌演習でも「目標中隊舎前」は再三だった。

分哨立哨中の悪友は良民証を見ながら菓子餅、時に紙幣を取上げ紛争を起こし、時に出て金を与えて帰し、友を叱るが効果なく悪友には困らされた。宣撫班の努力が功を奏し住民と融和して平穩裡に過ごし、自分も初めての教育に情熱を燃やした。五〇余日は氣力体力共に一番充実した十カ月余り。

忘れ得ぬ街、焦山河市も次期作戦のためお別れを告げて、部隊は帰らざる旅といわれた湘桂第一次、二次作戦は連日雨の中、連隊の將兵一堂に集い軍旗に最後のお別れをして泥濘の中を出動した。炎熱の八月、衡陽二糖で空に飛行機、地に戦車の猛攻、食無きまま連日連夜の迎撃戦闘に中隊二八名となる死闘を演じた。続いて秋雨けぶる桂林攻略戦は師団予備隊として、携帯糧秣、蠟燭、ワラジと諸準備をして、第一大隊の七星巖肉薄攻撃の時間を見ながら息を殺し、桂林市街衝を渡され命あらば分隊行動にて市役所裏に集合の指示を受けた。

当時、若き分隊長として補充のオッサン(三十八歳)を三名連れていた。身は桂林に心は内地の人達を戦場

に送る矛盾に腹が立ち、「死なしてなるものか」と神經を摺り減らした苦い思い出。

明けて昭和二十年、道県よりの南部粵漢打通作戦も大隊長レベルにて予備隊となり、以後追及したが部隊は大陸の大作戦に絶えず第一線にあつて数々の武勲に輝き感状を授与された名誉ある郷土部隊だった。しかし、作戦ごとに消え去る戦友の多きこと。明日は我が身と感じつつ、生命長らえて帰還した。

四年に一度連隊合同慰霊祭を行うが、今年(平成四年)も三月十日松山護国神社にて第八回を挙行し遠く東京方面よりも馳せ参じ、総勢六百有余名相集い、若くして大陸の荒野に散った多くの戦友の御魂安かれと祈った。またお互い老いの身を労り合った。

誘われてその昔の激戦地衡陽二糖の地に慰霊の旅を四度。彼の地は四十有余年の名残りを僅かに残して今は平和そのものだった。内地より持参せし米、清酒、煙草、菓子、水を供え線香、蠟燭に火を灯して合掌すれば、亡き戦友の顔浮かんでは消えまた浮かび涙頬を伝う。何のため誰のための戦争だったのかと想う時、

もう殺し合いは懲り懲りだ。

帰還したる時の家族構成

父 健 六十五歳 農家

母 病 六十四歳

兄 健 三十八歳 溶接業

姉 健 三十五歳 広島に嫁ぐ

姉 健 三十三歳 三津に嫁ぐ

姉 健 二十八歳 村内に嫁ぐ

兄 健 三十一歳 十八年召集関東軍 帰還

兄 健 二十六歳 十八年召集海軍輸送 帰還

弟 健 二十歳 十八年志甲飛台湾 帰還

昭和二十一年三月二十七日、帰還して見れば松山航空隊隣接地だったわが家も焼夷弾攻撃に焼失し、バラックに父母が住んでいた。棚の片隅に自分の写真が立ち盃の飯が供えてあり有難く涙が出た。自分が出征してより丸一年にして兄弟と三人が出征して名譽の家と成ったらしい。一番遅い自分に「お前は長く便りなく死んだと思ったが、よう帰りが揃った」と父母は喜んで。「家は焼けたが皆元気で帰って来た。家が身代わ

りになったのよ」とは気丈な老母の言葉だった。

【解 説】

歩兵第二三四連隊は昭和十四年六月、第四十師団編成下令により八月七日編成完結、九月十三日軍旗拝授、十月六日愛媛県松山の屯営を出発、二十七日中華民国湖北省武昌上陸、第二十三師団（旭）と警備交代し、湖北省咸寧県付近の警備に任じた。

爾來、中南支の作戦に参加、鯨部隊の名称のもと、その勇猛をうたわれ、昭和二十一年五月、上海出帆、復員したのである。

以下、部隊の戦歴を略記して、体験執筆者（昭和十七年十二月）復員まで）の四圍の状況解説に替える。

連隊（鯨第六八八二部隊）は昭和十四年十二月から同十六年九月）十月、長沙作戦参加まで、湖北省に於いて各作戦、警備に従事していた。昭和十七年に至るも同様であったが、四月）七月、第一・第三大隊主力は浙贛作戦に参加後、十月五日、警備地変更のため咸寧県汀泗橋に移駐、同地付近警備とある（執筆者配属さる）。

昭和十七年十二月〜同十八年一月二日大別山作戰參加、昭和十八年二月〜三月湖北殲滅作戰、四月江南地區戡定作戰、四月十六日〜六月二十五日江南殲滅作戰に參加（本作戦に於いて第三大隊は歩兵第二三六連隊―高知―と共に小柴支隊となり軍司令官より感状を授与さる）。

昭和十八年十月十八日〜同十九年一月十日常德作戰參加（第六十八師団配屬戸田部隊―歩兵第二三四連隊（第一大隊欠）、独立山砲兵第二連隊第二大隊、工兵第十二中隊）。

昭和十九年四月二十九日〜湘桂作戰第一期參加（本作戦に於ける戦闘で、第十一中隊、町田少尉以下二名、第十一軍司令官より感状を授与さる）。

八月九日〜湘桂作戰第二期參加（桂林等攻略に於いて第一大隊は軍司令官より感状を授与さる）。

昭和十九年十二月十四日〜同二十年二月二十七日、南部粵漢作戰參加（本作戦に於いて、鉄道及術工物占領の挺身部隊とし、甲挺身隊―第一大隊、丙挺身隊―第二大隊、及個人とし三浦衛生伍長は夫々軍司令官よ

り感状を授与さる）。

昭和二十年二月二十八日〜五月二十七日、広東省樂昌県付近に在りて鉄道術工物の確保並に同地付近の警備に従事、五月二十八日、広東南方地区の確保及び三南作戰に參加、八月十六日江西省南昌に於いて軍旗奉焼。

兵力、内地除隊三、〇五六名、現地除隊一〇一名、死亡六四一名、入院四九二名、転属一、七四五名、不明八九名、残留二九名。昭和二十一年五月、分離帰還す。

将校への過程

島根県 井上光雄

見習士官勤務四カ月

今次大戦に幹部候補生出身の予備役将校が残した実績は、将校としての戦績全般の過半を埋めてなお余りあるものと信ずる。